

# 平和を考える

## 大館市非核・ 平和都市宣言文

終戦から42年、平和憲法施行から40年が過ぎました。国民の6割以上が、あの忌まわしい戦争を体験していない世代となった今、改めて戦争の悲惨さ、平和の尊さを考えてみようという「戦争はもうイヤだ」を特集しました。市民の皆さんから寄せられた「戦争と平和」についての作文、「南中学区の太平洋戦争展」などを紹介します。いま一度、「平和」を考えてみましょう。

原爆の悲惨さを  
身をもって体験した唯一の被爆国 日本  
核兵器を廃絶せよ  
核を持つすべての国々へ  
いまこそ  
“核を捨てよ”と強くさげふ

この明るい空を  
この生まれた わが街のみどりと大地を  
唯一の惑星  
地球の青い空を  
決して破壊してはならない  
戦争はいやだ！  
くり返してはならない

若者たちは夢みる  
生まれたばかりの幼い子供たちは夢みる  
未来をの夢を築き  
私たちのくらしを守り  
自由と平和を守り  
地球の恒久の平和をねがう

核を捨てよ 兵器を捨てよ！

この市民のねがいと  
市民の声を  
反戦  
核兵器廃絶  
平和都市 大館市の  
宣言とする

1983年12月12日宣言



### 私が出会った「戦争」

内藤 イトさん

(釈迦内字台野道下・64歳)

私は戦地での体験はありませんが、「これが戦争なんだ」という出来事に出会ったことがあります。それは、戦時中に花岡の釜山で、鹿島組管理下にあった中山寮の中国人労働者が蜂起した時（花岡事件）のことです。毎日何人も死んでいくのを見て、どうせ死ぬのならと蜂起したといわれています。私はあの晩（昭和二十年六月三十日）、救護班として、負傷した人たちの治療介助に翌朝まであたった一人です。鹿島組事務所の中は殺気に満ち、壁には血液が飛び散っていました。それを見て、「これが戦争なんだ」と思いました。その後、殺された四人の解剖に

来られた東北大学の村上教授の助手を二日間務めたり、毎日のように中山寮へ病人の治療介助で往診して、その悲惨さに目をおおったものでした。体験した者でなければわからない、まさに生き地獄です。そのころ花岡には、中国人、韓国人、アメリカ兵などの収容所がありました。だから、終戦となり日本の無条件降伏を知ったとき、何をされるかわからないと思いましたが、私たち外科勤務の看護婦は、だれがどこから手に入れたか知りませんが、青酸カリを小瓶に入れ、いざという時にはいつでもどこでも死ぬるようにと、それぞれ肌身離さず持っていました。これが、私の青春時代の思い出の一



▲花岡の釜山病院前で（昭和19年）前列右から2人目が内藤さん

つです。先日、当時の中国人労働者のリーダー耿諱大隊長が、四十二年ぶりに花岡の地を訪れました。日中友好を説き、「あのころの日本国民も大変だった。悪いのはすべて戦争のせい」と、思いやりの言葉を残して中国へ帰られたこの人に何か教えられたように思います。日本人は中国人を虐待しましたが、中国人は敵国の子供を育ててくれました。中国残留孤児が日本を訪れるたびに、日本人は中国人に大きな借りがあつたことを痛感します。

**市長の対話ノート**

**不況と平和**

程度の違いはありますが、世界全体が不況の真ただ中にあります。この不況を克服し、永久に追放する方法はただ一つ、地球上から兵器をなくし、ムダな金を使わず、その金を地球上の人類の生活向上のために使うことです。つまり不況対策は平和を追求することなのです。

それは観念的で理想論だと言われることは承知しています。しかし目前に四十二回目の広島・長崎の原爆の日を迎えるに当たって「それは理想」と言っておられるでしょうか。四十二年前にあの「ピカドン」によって一瞬にして二十八万余もの生命が失われたのは事実であり、その体験は日本人より知らないのです。その日本人も六割の国民は戦争体験を持たない世代になっているからこそ、今、声を大にしながら理想論で現実に対処して行かなければならないのです。

平和は、水と空気と同じではありません。地球上の全人類の悲願であり、日常の努力がなければ保たれない最重要課題です。

そして現に米ソの軍縮交渉が続いているわけですから、日本は一方に組み込むのではなく、世界唯一の被爆国として、理想に近づけるために最大限の外交努力をするよう努めなければなりません。大館からも世論づくりをして行かなければならない大切な時であると訴えます。

市長の対話ノート No.157

釜山 健治郎